



猿八座公演

さるはちざ

人形浄瑠璃

# 信太妻

しのだづま

葛の葉子別れの段



平成 27 年

10月25日 (日) 13 時半～

浄瑠璃 渡部 八太夫 (三味線弾き語り)  
人形 猿八座

会場：砂丘館 座敷・居間・茶の間  
定員：50 名  
料金：大人 2,000 円 中学生・高校生 1,000 円  
小学生以下無料 幼児可 (保護者同伴)

申し込み受付開始日 9 月 20 日より  
申し込み  
電話・FAX 025-222-2676  
E-mail sakyukan@bz03.plala.or.jp

\*E-mail でお申込の場合は  
連絡先 (電話番号)、人数を併記してください

## 砂丘館

旧日本銀行新潟支店長役宅

〒951-8104 新潟市中央区西大畑町5218-1  
tel./fax. 025-222-2676  
sakyukan@bz03.plala.or.jp  
指定管理者:新潟給食・新潟ビルサービス特定共同企業体



- 会場には駐車場がありません。また、周辺の道路は駐車禁止です。公共交通機関をご利用下さい。
- 新潟駅からのバス:浜浦町線 C2 系統又は観光循環バス「西大畑坂上」バス停下車徒歩1分
- 新潟市西堀地下駐車場をご利用の方は、駐車券掲示にて1時間分の無料券を差し上げます。

私たちは砂丘館の自主事業を  
応援しています。

香園ありれ 株式会社

新潟ビルサービス

NSGグループ

丸屋本店

株式会社ナレッジライフ

藤田金属

郷土の文化に親しむ会



# 人形浄瑠璃 猿八座

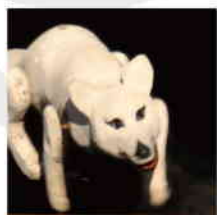
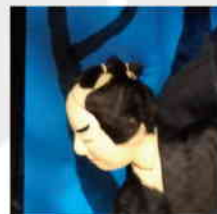
「猿八座」は佐渡に残る「文弥人形」を基本に、数ある説経、古浄瑠璃から現代に向く作品の復活上演に取り組んでいます。

「説経」「浄瑠璃」は中世に始まる語り物。操り人形を伴って、京、大坂、江戸の劇場で盛んに上演されました。1700年前後に竹本義太夫がそれまでの浄瑠璃を大成して「義太夫節」を創始し、今や浄瑠璃の代名詞となりました。義太夫節以前の「古浄瑠璃」の多くは荒唐無稽ながら、素朴な表現に捨て難い魅力があります。

文弥人形の語りは17世紀中頃に大坂の岡本文弥が語り、全国に広まった古浄瑠璃の一つ「文弥節」です。佐渡では明治初期まで盲人が語り継いだため、古浄瑠璃の特徴をより強く残していると考えられます。人形は一人遣い。一体の人形を三人で遣う文楽の人形よりも小さく、構造も簡単ですが、古浄瑠璃に相応しいテンポの速い動きが可能です。

古浄瑠璃の復活上演には、太夫（語り手）の語りを聞き書きした「正本」を読み下し、文献や今に残る三味線音楽の曲節を参考に、新たな作譜が必要です。2009年に元文楽の三味線奏者 鶴澤浅造（越後角太夫）が越後を舞台にした説経浄瑠璃「弘知法印御伝記」を復曲。2011年からは東京八王子在住の渡部八太夫が座付きの太夫となり、佐渡の文弥節を基本にして、古曲の復曲と新作の作譜を続けています。

猿八座を主宰する西橋八郎兵衛が住む佐渡の地名です。現在は新発田に稽古場を置き活動しています。



《渡部 八太夫》語り 三味線

1959年 東京生まれ。東京都八王子市在住。東京都あきる野市の小学校に勤務中、地芝居、秋川歌舞伎の復活と秋川子ども歌舞伎の立ち上げに関わったことをきっかけに、邦楽（長唄、義太夫）を始める。  
1993年 東京都無形文化財「薩摩派説経節」を継承する「説経節の会」に人会、杵屋徳波（京屋波）に師事する。1997年「小栗判官一代記」で初舞台。初代彦太夫、五代目小若太夫襲名のうち、2005年薩摩派説経節家元十三代目若太夫を襲名。この間、国立劇場などで八王子車人形や江戸写し絵の語り、2002年には佐渡で文弥人形、猿八座の語りを勤める。2011年3月教員を退職して猿八座の座付き太夫として古説経、古浄瑠璃の復活上演のため、新たな浄瑠璃「猿八節」の作曲に取り組んでいる。



《西橋 八郎兵衛》人形遣い

1948年 北海道札幌市生まれ。佐渡市在住。大学で演劇学を専攻し、1970年文楽人形遣い吉田篤助に入門、吉田篤司の芸名で舞台を勤める。  
1979年文楽を退座し佐渡に移住、文楽人形「大崎座」に入座、その後文楽人形「真明座」に加わり現在に至る。また、1995年「猿八座」を旗揚げし、説経節「信太妻」「小栗判官」など古典の復活上演や文弥節以外の邦楽（富木節、長唄、多摩説経節、横笛など）洋楽（オペラ、モダンジャズなど）、朗読、舞踏などと国内外で共演。  
2006年から5年間、元文楽三味線弾き鶴澤浅造と共に新潟市民を募り、越後を舞台にした古浄瑠璃「弘知法印御伝記」を復活上演。2011年4月からは渡部八太夫と共に、伝統人形芝居の継承と可能性を拓く活動を続けている。



「猿八座」は新発田市内、東光寺境内の「心亭房」をお借りして稽古しています。人形を遣ってみたい方、衣装やかしらを作ってみたい方、浄瑠璃を語ってみたい方、随時、座員を募集していますので、お気軽に稽古場をのぞいて見て下さい。

お問合せ 電話 080 2012 9115 西橋

あきらめきれぬ父は葛の葉の姿を求め、日の暮れた森をさまようが見付ける事が出来ず、悲嘆のあまり自害しようとする。そこに狐が現れ、再び葛の葉の姿となって童子に形見の品を与える。成人した童子はその形見の不思議な力で、帝の病の原因をつきとめ、宮廷お抱えの陰陽師となる。

残し、泣く泣く信太の森へ帰って行く。  
恋しくば、尋ね来てみよ、和泉なる 信太の森の うらみ葛の葉  
あきらめきれぬ父は葛の葉の姿を求め、日の暮れた森をさまようが見付ける事が出来ず、悲嘆のあまり自害しようとする。そこに狐が現れ、再び葛の葉の姿となって童子に形見の品を与える。成人した童子はその形見の不思議な力で、帝の病の原因をつきとめ、宮廷お抱えの陰陽師となる。

あらすじ  
和泉の国（現在の大阪府）、信太の森近くに、ひっそり暮らす家族があった。秋の一日、夫、安倍保名は畑を耕しに、野良へ出かけた。妻は七つになる安倍の童子（成人して陰陽師安倍晴明になる）を寝かしつけ、はたを織り始めるが、庭に咲き乱れる菊の花に見とれるうち、うっかりその本性を現してしまう。実は妻は、以前保名が命を助けた狐の化身であった。目を覚めた童子に狐の姿を見られた妻は、最早人間界にとどまる事を許されない。夫と我が子への尽きぬ思いを一首の歌に残し、泣く泣く信太の森へ帰って行く。

解説

平安時代の陰陽師・安倍晴明は、並外れた占いの力を発揮し、いつの頃から母は狐だという伝説が生まれました。近世には浄瑠璃の演目となり、最古の台本は一六七四年に刊行された「しのだづま つりぎつね付あべノ晴明出生」です。今回、この正本を用いて、五段のうち「葛の葉子別れ」で知られる三段目を当時の詞章そのままに、渡部八太夫が佐渡に伝わる文歌節をもとに作曲した語りで上演します。

「信太妻（しのだづま）」

葛の葉子別れの段

出演 猿八座

浄瑠璃（三味線弾き語り）  
人形配役 安倍保名 金子与八  
童子（後の安倍晴明） 堀 八島  
葛の葉（実は狐） 西橋八郎兵衛  
乳母 後藤幸八  
狐人 逸見八里